
何故か勇者

川岸新兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何故か勇者

【Nコード】

N0733Z

【作者名】

川岸新兎

【あらすじ】

十五年前に出現した魔王。目的は侵略でも殺戮でもなく、移住。魔王が移住の対価として人類に差し出したのは魔法という奇跡の技。少年、瀬川宗也は魔王の下で魔法を学ぼうと魔術高校の入試に挑戦するが、とある偶然から手にしたのは聖なる剣。世界で唯一魔王を殺し得る勇者となった彼の運命は！？

勇者、聖剣と出会う

十五年前、突如別世界からやってきた魔王は、絶大な力を持ちながら、人類を滅亡させるわけでもなく、世界を破滅に導くわけでもなく、移住を目的としていた。

対価として彼が持ち込んだのは異界の技術、魔法。人類は空想の中にしか存在しなかった力を手に入れたのだ。

最もその恩恵を受けた国は、魔王が住む日本。

中でも魔王城の建つ由久市は、現在“魔法都市”と呼ばれて、世界中の注目を集めている。

由久市に存在する国立魔術大学附属高等学校は、現在世界中で唯一魔法技術の専門教育を行う高等学校である。

今日は書類審査を通過した来年度入学希望者に対して筆記試験を行っていた。

「ああ、くそ。駄目だ、絶対ダメだった！」

そう言って頭をかきながら試験会場となった校舎から出てきたのは、瀬川宗也という少年だった。

「気にすんなって。最初から駄目元なんだから」

「そうだよ。瀬川は書類審査に受かったこと自体奇跡だぜ」

同じ中学に在籍する仲間たちが茶化す。

「喧嘩売ってんのかコラ」

「事実だろ。俺だって自分は書類で落とされると思ってたし。去年はウチの中学、全員書類落ちだって聞いたよ」

そう言ったのは同じ中学の中で一番学力のある宮野悟。

「宮野でも手ごたえ無し？」

「マジで運がよかったらってところかな」

四人がそろってため息をつく。

「これからどうする？ 俺は観光でもしてこようになって思ってるんだけど」

悟の質問に答えたのは二人。

「俺は滑り止めの試験対策。家に帰るよ」

「俺もー」

「宗也は？」

少し悩んで答える宗也。

「宮野に付き合うよ。観光に来たこともなかったし」

「わかった。じゃあここから別行動だな」

そう言って悟と宗也は二人と別れた。

真っ黒。それが魔王城を見た宗也の感想であった。

「中まで入れるのか」

「一階部分だけ一般開放されてるみたいだな」

パンフレットを見ながら悟が言う。

「警備員とかいないのかよ。階段上がったりする奴いないのか？」

「魔法による完全自動警備システムだそうだ。障壁が展開されてて階段には近づくこともできないらしい」

熱心にパンフレットを読んでいた悟だったが、手の中からパンフレットが滑り落ち、ひらひらとどこかへ飛んでいく。

「おっと、スマン。ちょっと拾ってくる」

「ん、早めにな」

パンフレットが入ってしまった、ドアのない部屋に悟が入ろうとするが。

「あれ？」

「どした？」

「は、入れない？」

パントマイムの様に部屋の入り口部分で止まる悟。

「これが障壁ってやつなのっ、かっ!？」

「だったらパンフレットも入り込まないだろ」

そう言っただけで宗也がパンフレットを取りに行くと、悟を拒んでいた力が嘘のように消え、転んだ悟が悲鳴を上げる。

「何やってんだよ。ほら、パンフレット拾ったし、行くぞ」

「ああ、なんだったんだ一体……」

悟が謎の現象の正体を確かめようとして、辺りを見回し、硬直する。

「――おい、宗也」

「なんだよ」

「俺の視線の先に、何がある？」

言われて悟と同じ方向を見ると、そこには地下に続く階段があった。

「階段だな」

「ああ、この部屋には階段しかない」

悟の言葉通り、この部屋には階段以外何もなかった。

悟がゆっくりと階段に近づく。

「おい、階段には近づくこともできないって、さっきお前が……」

言葉は途切れた。悟が階段を、確かに一歩、降りたから。

「階段を守る障壁は、この部屋の入口にあったんだ」

「だったらなんで、パンフレットが入って――」

「わからない。でも、お前が入ろうとしたら、障壁は消えた」

何かまずいことになるうとしている。そう思った宗也は悟の手を取って部屋から出ようとし、失敗した。

「――がっ!？」

見えない障壁に頭をぶつけ、押し戻された宗也。悟も外に向かって手を伸ばしたが、障壁がそれを阻む。

「俺達はここから出られないみたいだな」

「どうしろつつうんだよ、この状態」

悟が少し考える。

「……俺は下に降りてみようと思う」

「いや、それはマジでやばくないですか？」

「ここで見つとしてるよりかはいいだろ。下に人がいれば、その人に事情を説明して出してもらえばいい」

そう言って悟は階段を降り始めた。

「だれかいますように……」

仕方なく、宗也は悟を追いかけた。

宗也の願いは届かず、二人はやけに広い地下室に出てきた。

「誰もいないな」

「おまけに何もない、か」

悟の言葉に首をかしげる宗也。

「いや、あそこになんかある」

「どこに？」

「どこって、真ん中だよ。部屋の真ん中」

悟は目を細めて、部屋の中央を見る。

「俺には、何も見えない」

「いや、剣、か？ 床に突き刺さってるじゃないか。鎖がじゃらじゃら巻き付いてて」

悟は念を押すように訊く。

「お前には、見えるんだな？」

「……ああ。やっぱりなんかあるとしたら俺の方かよ」

「みたいだな。お前には何かがある」

宗也はは、あっと息を吐き、気合を入れた。

「あの剣、抜いてみる」

「いいのか？」

「進入不可能なはずの場所で、俺にしか見えない剣だぜ。俺がやるしかないだろ」

「……悔しいな。魔王城に隠された武器を見つけたって、絶対なんか選ばれた者っぽいから」

「もしかしたら、魔王の後継者になったりしてな」

軽く笑って、宗也は剣の所にやってきた。

「これで何にもならなかったら、この剣蹴り折ってやる」

宗也はそう言って剣の柄に触れる。

瞬間、目が潰れそうなほどの光が地下室を満たした。

「——うわっ！！ ック！！」

思わず手を放し、腕で顔を覆ったが、それでも暴力的な光が宗也の目を襲う。

「おい！ 悟、大丈夫か！？」

ああ、という返事は帰ってきたが、何故だかさっきまでの距離よりも遠くから聞こえてきたように思える。

そんなことを思った直後、宗也の腕はがしっと掴まれて、とんでもない力で顔から引きはがされた。

驚きで思わず目を見開いたら、光は収まっていて、目の前にはとびつきり綺麗な少女の顔があった。

意志の強さを感じさせる金色の瞳。透き通るような、それでいて輝いて見える肌。髪は内側に炎を宿したかのように輝いていて、整った顔には思わず目を奪われた。

「ふむ、そなたが今代の勇者か。今までの者と違い、凡庸な顔をしているな」

綺麗な紅色の唇が紡いだ言葉は、そんな言葉だった。

「——勇者」

宗也の口から滑り落ちた言葉を聞き取り、少女は答えた。

「そうだ。“光の神”ルグナ・ディオ・アレフトの加護を受けし人の子の末裔よ。そなたは世界を滅ぼそうとする闇を切り払い、神の光を掲げる使命を負った勇者だ」

「る、ルグ……？」

少女の言葉を理解出来なかった宗也に、なおも少女は言う。

「我は光の聖剣『アーヴライト』の精霊、フィリアだ。さあ、勇者よ、我を掲げよ。光の神の名のもとに、悪しき魔の王を打ち滅ぼすのだ！」

少女、フィリアは金色の瞳を輝かせ、宗也に手を差し出した。

宗也には何が何だか理解できなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0733z/>

何故か勇者

2011年12月2日20時55分発行